

嘘から生ま
れたマコト君

真
嘘
嘘
嘘
嘘

作者さんや読み手さんの声は
<http://www.columnland.net/> にてどうぞ

1
家に関する嘘　く年代別く

小学校低学年（友達の前にて）

「オレんち、ロボットになるんだぜ！」

中学生（好きな子と下校中にて）

「うっん、全然迷惑とかじゃないって！俺ん家もこっちの方あるからさ。通り道だし」

高校生（彼女の前にて）

「いいじゃん、うち来れば……だから、何もしいってば！」

30代（訪問先の老夫婦宅にて）

「やっぱり床下にシロアリがいましたよ。ええ、結構ひどいですね。早急に工事が必要です。今ならキャンペーン中でお安くなっておりますが、いかがいたしますか？」

50代（とある公園内、警察官の前にて）

「え？ここ、僕の家ですけど？」

その時

どこにでもいる平凡な高校生のはずの私には、なぜか平凡でない部分があった。私は、嘘を真実に変える事が出来た。

嘘をつぶやくか思い浮かべ、祈る。たったこれだけ。先天的なものなのか後天的なものなのかは分からない。気づいたら、出来るようになっていた。

「ねえねえ、今日ってテストやるんじゃないの？なんで普通に授業してるの？」

「さあ、先生忘れてるんじゃない？ラッキーじゃん」

クラスメイトのひそひそ声が聞こえてくる。そこで私は、またやってしまったことに気付いた。どうしてだろう、最近はふとしたことでほとんど無意識に力を使ってしまう。出来れば使わずにいたいはずなのに、どうしてもその魅力には勝てないのだろうか。

この程度のことならばまだいい。自分のお財布の中身をいっぱいにしてしまったこともあった。

ある日、私は本当に恐ろしいことをしてしまった。偶然街で喧嘩、というより一方的な暴行を見て、「目の前で暴力をふるっているやつは実は存在しない」と呟いてしまった。一瞬のうちにその男は消え去った。死よりも恐ろしい、存在自体を消してしまった。しかし、一度やるとストッパーが緩くなるのか、その後も何度か人を消してしまい、しまいにはもう恐ろしさなんてほとんど感じなくなってしまう。最初は悪いことをしている人を消していたのだが、そのうち少し気に食わない人まで消すようになっていた。

ある日の帰り道、一人で歩いていると、一人の男が目の前に現れた。短髪でグレーのスーツをびしりと決めたその男は一見すると普通のサラリーマンだが、こんな時間の住宅街にこんなっておかしいし、その鋭い視線を私のほうにむけてくる様はさらにおかしかった。その男は私の近くまで来ると、「その娘、貴様は力の使い方を間違えた。」と言った。

最初は何のことを言っているのか理解できなかった。しかし、その男が「理の真偽を入れ替える力のことだ」と言ったので、私は驚きで目を見開いた。今までの力のことは誰にも言ったことがなかったからだ。自分以外の誰も知らないはず。そのまま硬直していると男は再び口を開いた。

「なんで、という顔をしているな。私はその筋のことを専門にしている者だが：まあ、今はそ

んなことはどうでもいい。貴様というやつは、本当に自分勝手な生き物だ。うまく使えば世の中をよりよくするために使えるはずの力を、自分のわがままを通すために使って。」

私は言葉を返せなかった。言われるまでそのことがわからなかったわけではない。ただ：「ふん、甘えてしまったのだろう。楽しいよな、自分の思い通りになるのは。気持ちいいよな、欲望に抗うことなく流されるのは。」

侮蔑のこもった視線を、男は私へと注ぎこんだ。頭では分かっていたはず。しかし、目の前の快楽に目がくらんでその事実を蓋をして見なかったことにしてしまった。なぜこんなことをしてしまったのか。自分はなんと身勝手でおろかだったのだろう。

今まで知らないふりをしてきた罪悪感。それが堰を切って私の心の奥底から流れ込んできた。

「そう、やつと自覚したようだ。だが、もう遅い。貴様が今何を思っているようにと、貴様が犯した罪は消えはしない：と言いたいところだが、実はそうでもない。貴様はやり直すことができる。わかるか？」

そういうと男は私に背を向けた。やり直せる？その答えはすぐに出了。一言つぶやけばいい。簡単だ。今まで何でもやってきたのだから。「私は、嘘を真実に変える力を使ったことがない。」

言い終わると、急に視界が渦巻きだし、体が後ろへと引つ張られるような感触があった。それと共に意識もだんだんと薄れだした。どこか遠いところで、誰かが泣き叫ぶ声が聞こえたような気がした。

「業務報告、例の娘を確認。処理は無事完了した。」

「お疲れ様です、先輩。しかし：本当によかったのでしょうか？」

「なにがだ」

「その彼女の能力使用履歴の一番上の項目、見ましたよね？」

「：良い悪いは俺らに決められることじゃねえ。いいからそこで待機しろ：」

赤くなりかけた空の下、一人の男が停めた車の運転席に座って、書類をパラパラとめくっている。ふとその手が止まり、そのページに目をさまよわせた。表が記載されたそのページが一番上の項目に目が行くと、男は口を開いた。

「初回。17年3か月前。出生時のトラブルで死亡寸前だったが、その事実を『健康体で生まれた』と修正。」

The man in London.

昔、ロンドンにある男が住んでいた。彼は小さい時は普通の家庭の普通の男の子だった。

その男が嘘をつきはじめてのは10歳のエイプリルフルの日からだ。その日家族にある大きな嘘をつき、味をしめた彼は翌日神様に誓ってしまった。「日曜日のお祈りの日、私は必ず嘘をつきます。」

それからである。彼の嘘つき人生が始まったのは。はじめのうちはかわいい嘘だと思つて特に気にしない友人もいたが、どんどんエスカレートする彼の嘘に、しばらくすると誰も耐えられなくなり、ついには彼と遊んでくれる友人は誰一人としていなくなつてしまった。家族は彼の嘘をやめさせようとしたが、なんせ神様との約束である。彼としても簡単にやめるわけにはいかない。そのためだんだん家族もあきれて、彼を放つておくことが多くなつた。

やがて彼はそんな自分に嫌気がさすようになった。「なんであんなことを誓つたのだろう。」彼は何度も考えた。「神様を裏切つてでも元の自分に戻りたい。」

ある日彼が霧のかかったベイカーストリートに一人佇んでいると、向こうから人影らしきものが近づいてくるのがわかつた。だんだんはつきり見えるようになり、老人が彼の横を通り過ぎようとした。彼は思い切つて話しかけた。

「僕は嘘つきなんです！」

老人は、少年が自分に話しかけてくることも、話す内容も全部知つていたのではないかと思われるほど落ち着いて少年に答えた。

「君が言うように、君がもし本当に嘘つきだとしたら、君の言っていることは嘘ということになる。さすれば君は嘘つきではないことになる。君の言つたことは本当のことで、君は嘘つきだということじゃ。これで最初に戻つてしまったのじゃ。どうじゃ、自分が嘘つき人間なのかどうか、わからなくなつたじゃろ。嘘と本当なんて紙一重ということなのじゃ。わかつたかのう。君は自分の心に素直になればいいのじゃ。神様も喜ぶじゃ。」

少年は、その出来事以来、他に類を見ないほど誠実な人となり、のちに賢者とよばれるようになったそうだ。

カモメの駅

駅舎のそばで水揚げされる新鮮な海産物、それがその駅の自慢だったという。

くたびれた制服に身を包んだ男がいま、ゆっくりとそこから歩いてきた。

そのしわがたくさんの顔をくしゃっとさせて男は笑いながらこういった。

「カモメが飛んでる
「マシユケ、パイエカイ…。」

本 当 に た く さ ん
ソノカイ…ポロンノ…。」

今はまだ冬である。カモメなど数羽しか飛んでいないのが日常だった。

しかし今日は夏場にしかあまり飛んでいないカモメが、まさに無数に駅の周りを囲っていたのである。

まるで駅長との別れを惜しむかのように、いつまでもいつまでも囲っていた。

「やあ、おじいさん。増毛駅ましけえきってここですよ
しかったですか。」

群がるカモメをかき分け、雪を踏んで中年…いやもう50だろうかという小太りの男性が気さくに声をかける。

「ええ、ここでもいいですよ。けどもう電車は…、いえ入場者の方ですね。こちらへどうぞ。」

男は小太りの頭を見て駅舎内まで招き入れた。小太りは黒い帽子を深めにかぶっている。

「どうも、入場券をいただけますか？」

「わかりました。300円になります。」

男は流暢に日本語を返し、その手で力強く、しかしどこか弱弱しくハンコを押す。

小さな紙切れには

「増毛駅」「1月31日」の文字。

「どうもありがとうございます。いやはや無人駅になる前に来れてよかった。」

男はまた顔をくしゃっとして笑っていた。

「これからもよろしくおねがいしますね。」

「そんな、効果があると聞いて…その…東京から一人で来たんですね。家内にも内緒で。」

「それはまた遠いところから。」

「しかし、カモメが多いですね。いつもこんな感じなんですか？」

「ええ、ここには本当に多いんですよ。」

少し力が入ってしまったと思い、その後は海を見つめてみる。すると不思議なことにいつからか男の顔はぼんやり柔らかくなっていた。

入場券を購入した客は嬉しそうにそれを頭にすりつけている。男性を中心に多くの希望を与え続けていたこの駅の功績は大きいものがあつた。そう思ってみた。

男は海を見たまま今度はクスリと笑った。このような男はこれで何人目だろう。

そんなことを考えていた。

日が落ち、駅を闇が包み、カモメの声だけが静かな海岸線に響く。

「カモメよ、クアニネウェンペ。」

そうぼつりとつぶやくと、男は客に向かって半笑いでこう言った。

「お客さん、この『増毛』っていう地名はね、アイヌ民族の髪の毛の神様の『マシケ』さんがいたっていう伝説から……。」

稚拙すぎると思った。

だが、仲間の声が聞こえたような気がして

小さな嘘をついてみた。

「将来の夢は何ですか？」

小学校のときの、卒業アルバムの作文のテーマ。

彼は、まだそのようなものはもってなかった。

しかし、卒業アルバム。一生残るものだから、「まだない」などという下手なことは書けない。し、夢についての話ができれば、規定の作文用紙の枚数に達しないではないか！

そこで彼は考えた。

「ホントの夢じゃなくてもいいから、何か派手なことを書くか（笑）」

そこで彼はこれを彼の夢として、作文を書いた。

「泥棒」

映画のように、アメリカ中の金庫を荒らしまわる！

将来の夢を、サッカー選手だの、野球選手だの、医者だの、弁護士だの、そんなことを書いている中で、彼の夢（フィクションだが）は異彩を放ち、一時、彼は皆の注目を集めたのだった。

—そして、三年後。

彼は今、コンビニのスタッフルームで、厳しい顔をした店長と向き合っているのだった。

食べれるけど見えないもの

「黄桃なんてものはもうこの国にはない。」

と言ったところで誰も信じないだろうな。男はふとモモの缶詰の前で立ち止まりそんなことを考えていた。

缶詰などに加工された黄桃を見たことがあっても実際に木になっているものなんて見た人間なんて皆無だろう。世の中そんなもんだ。

黄桃なんてものはこの国にはすでにない。それは本当だ。自分は知っている。

つい半年前のことだ。

この国の主農産物である病害が襲った。その被害は全国に広がり、日々悪化の一途をたどる一方だった。ただでさえ食料の自給率は低い国だった。この作物を失うわけにはいけなかった。この国の農業の完全な衰退を許すわけにはいけなかった。

科学には強く、裕福な国だった。ただちにその病気に対する特效薬を作りだし、政府はかなりの金をかけ全国にこれを散布した。

この国の農業は守られた。だがこの薬品が黄桃だけに有害だったらしい。かなりのペースで全国の黄桃は枯れていった。原因はわかつていた。というより政府はそれを分かっているが散布をしていた。

「黄桃なんてものはもうこの国に必要なはない。」

こういつた統一的な見解が政府の中にあつた。確かに缶詰などを作っている企業はもとから本物の桃などは使っていないし、まず国民はそういった果実の存在など気にしてはいない。なくなってもだれも悲しまない。

マスコミは気付かなかつた。次々に発覚する隣国の食品問題。その報道で精いっぱいだった。誰が流した情報かにも気付かず、完全に踊らされていたというのが正しいのかもしれない。

黄桃なんてものはもうこの国からなくなった。あつという間だった。

だが多くの人間はこのことを知らない。

事実はちゃんと伝わらない。何がフィクションで何がノンフィクションなのか、そんなこともわからない。いやな時代だ。

「だいたいこの物語自体がフィクションだしな。」

男は小さくつぶやいて缶詰コーナーを後にした。

「ごめん：彼女として見れなくなっただけ」

どうせなら最後まで

ああ：やっぱり泣かせちゃった…。百パーセント俺が悪いから、罪悪感でいっぱいだ。こんな時、優しくしてはいけないのだろうけれども、抱きしめずにはいられなかった。でもしうががないことなんだよ…。気持ち冷めてしまったのだから。

いきなり聞かれてびっくりした。好きな人できたの？だって。なんでお前はそうゆうところ、勘がいいんだろうな。なぜかこうゆうことはいつもばれるんだよね。今回ももう隠し通せない。だから聞いてみた。知りたい？って。：わかった。全部、話すよ。

気づいたら、泣いていた。こういう話だったことわかっていたのに。ちゃんと覚悟してきただけなのに。泣かないって決めてきたのに。最近全然うまくいってなかった。メールをしても返ってこないし、会話も続かない。なんだかすごく距離を感じていた。嫌な予感がして、好きな人でもできたのかもなっと思ってたんだ。

殴られるだろうと覚悟してお前を見た。笑ってる：すごく辛そうに…。こんなに最低なことをしているのに、何も責めてこない。

いろんなこと聞かれた。これ以上嘘はつけないで、全部答えた。いや、違うな。俺自身が楽になりたいだけ。お前がただ笑って聞いているのを見るのが辛くなって、本当にごめんで、また抱きしめた。

今は本当のことが知りたい。ただそれだけ。そして、それを見せられた。それはもう自分ではどうすることもできない現実で、辛くて、苦しくて、息もできなくなりそうだった。頭が真っ白。なんの感情もわからない。怒る気にもならない。なんか：笑えてきた。

ずっとこのままでいたいと思ったけれど、そうもいなくて。選択肢なんて最初からなかったから、こうするしかない。大丈夫。大丈夫。今が辛いだけでそのうち忘れられる。私は：大切な人の幸せを願える人でありたいの。だから、ね。

ありがとう。大好きだったよ。じゃあね。

「幸せになってください」

フォックス・テイル

禁煙の取調室から出て、小山は煙草に火をつけた。

煙草でも吸わないとこんな事件やつてられない。

「小山さん、どうでしたか？」

警官になりたての部下が話しかけてくる。

死者二名の派手な事件だから気になるのだろう。

「本人から聞いたが、本当に、派手な事件だよ」

「へえ、教えてくれますか？」

部下の要求に小山は煙草を燻らせながら応じた。

始まりは高級時計のサイトだったそうだった。

稲尾はそのオフ会に呼ばれた。

ファンが集まって時計のオークションを始めようという企画だったらしい。山の中

にある谷川沿いのバンガローを借りて、四人の人物が集まったそうだった。

稲尾、菊谷、下川、そして企画者の茅野。

この時はまだ互いの （ハンドルネーム） H.N. しか知らなかったそうだった。

集まったのが夜遅くだったので、バンガローに着くなりすぐに夕食を食べることになった。

茅野がキッチンにつき料理を始めた。

稲尾と菊谷はリビングで談笑し、下川は自室にいた。

ある程度料理ができたということで稲尾が下川を呼びに行くことになった。

部屋のドアをノックし、返事がなかったので部屋に入ったところで、刺殺体となった下川を発見した。

下川の近くには凶器の包丁があり、床に狐の尻尾と刻まれていた。当然持ってきた時計と買い取り用の現金はなくなっていた。

菊谷が部屋に入った。稲尾の悲鳴に呼ばれたらしい。

二人で恐怖して固まる。とりあえず茅野を呼ぼうとして、稲尾と菊谷はキッチンへ走った。

しかしすでに茅野は消えていた。キッチン窓の窓は不自然に開かれ、床には狐の尻尾と刻まれていた。キッチンは谷に突き出して外に出られるようなものじゃなかった。

それを見て菊谷は携帯で警察に連絡した。その記録は警察にも残っている。

しかしバンガローが山の中にあり、夜遅くということで警察が来るまでは一時間ほどかかるということだった。

稲尾は隠れて待とうと提案した。菊谷は犯人を迎え撃とうと提案した。

結果は決裂した。

稲尾と菊谷は別れて行動することにして、稲尾は物置に隠れるために荷物をまとめ始めた。

その時菊谷の悲鳴が聞こえた。続いて鈍い打撃音。

部屋から廊下に出れば、菊谷が頭を割られて死んでいた。その横には血で書かれた

狐の尻尾の文字。

稲尾は荷物も放り出して物置に隠れた。身を震わせてひたすら警察を待つ。

そこで稲尾は気がついた。消えた茅野の （ハンドルネーム） H.N. がフォックス・テイルだったことに。

茅野が下川と菊谷を殺して自分は隠れて稲尾を狙っている。

稲尾は恐怖に震えながら耐え続け、やっと到着した警察に発見された。

警察が入ったところには茅野の姿はなく、全員の時計と現金がなくなっていた。

フォックス・テイル
狡猾な狐は多額の現金と高級時計を奪って消えたのだ。

というのが事件の全貌だ。今日事件から三日経ち、稲尾に警察での聴取を頼んだところだ。

今のところ茅野を人相書きで手配中だ。

部下は事件の異常性に満足している。たしかに異様な事件だ。

「おい、小山！」

喫煙スペースの外から呼んでいるのは直属の上司だ。

何かあったのかと小山も近づく。

「お前が進めている事件、谷の底の川から死体が上がったぞ」

「誰ですか？」

その問いに上司は写真で答えた。この顔は見たことがある。茅野の人相書きだ。

「それとこれも近くに落ちていた」

出されたのは空のジュラルミンケースの写真。それと名刺大の小さなカード。

それを見て小山は全てを察した。

「さっき出てった証言者を探せ！稲尾だ！」

稲荷の尻尾を連れ戻せ！

もう無駄だと思いが小山は走った。

名刺大のカードに書かれた一言の言葉。

「Fox Tail」
真つ赤な嘘

事件後

「僕はただ退屈だったんだ。だから村人たちみんなを驚かせてやろうと思ってやったのさ。でもまさかあんなことになるなんて…」

*

「外で大きな人ばかりができてから何だと思って行ってみたら、まさかあの子が…」

*

「僕はただ嘘をついただけさ。でも神様はそれを許しはしなかったらしい。きっとこれは天罰だ。」

*

「あの子？ああ、元気な子だったよ。勉強とかはあまり好きじゃなかったみたいだけど、子供のうちは大体そんなもんじゃないのかい？」

*

「あのときは気が動転してて自分でも何が起こっているのかさっぱり分からなかったよ。今では嘘をついたことを後悔してる。」

*

「いやゝ驚いたよ。だってあの子の鼻がどんどん伸びていくもんだから。」

鶯替え神事

初天神(二月二十五日)に行われる神事。

木彫りの鶯を参拝者同士で交換するのだ。

なお、鶯とはスズメ目アトリ科の小鳥である。

神事の目的は、昨年の凶を鶯に託して嘘にしてみらう、つまり嘘を吉に替えるというものだ。

託されるほうはたまったもんじゃないだろう。

「へいつ追加分お待ちっ!」

「今年はっ、例年よりっ、多くないかっ」

「文句言ってねえで羽を動かせ 羽を!」

「試験に落ちた」ねえ・・・『採点ミス』。

「えーと、『恋人の浮気』ね、今年も多いな(笑)。

よし、『実は気のせいだった』。」

「『婚約指輪を無くした』ね。『意外なところから

見つかる』と。」

「よおーし。だいが減ってきたなあ!」

「おーい追加だよっ!」

いろいろ

「『ババ』これで終わりと信じていた。・・・。」

「『告白して玉砕』か。『新たな恋の始まり』。」

「『消しゴムの角を使われた』? 知るかボケ!」

「『身内の不幸』なんてどうしろっくんだよ!

もついい!ばきっ!『夢だった!』」

「『試合に負けた』か! よし、『夢だった!』」

「『パソコンが壊れた!』・『夢だった!』」

「これで終わりだ!」

「またまた追加だよっ!」

ぶちっ

「まだあるんかいっ! もついやだっ! 不幸は別の人間に押しつけられればいいよなっ!」

「勝手にしろ! さっきからうるせえんだよ!」

「『仕事忙しい』? ぶあーか! っちはもっと忙しいっくんだよ!

こいつにや『怪我』だ! 『怪我』やっつけ!」

「無理やり休ませるつもりか!」

「そーだよ! 『ダイエットが成功しない』? これは

『ひどい下痢に悩んでいる』でいいや!」

「おーい! 不健康なダイエットすぎるだろう!」

「人間の健康なんて知ったことか! 次は・・・」

「『五、六人と同時に付き合っつのは大変』だと!

俺は何年恋鳥いないのか知ってんのか!

おい! 『恋人の浮気』を五、六個よこせ!」

「・・・こいつもやる。『関係のもつれ』だ。」

「よし! 次は・・・」

「お・・・終わった・・・」

「今年は去年の五割り増しだつてさ・・・」

「まったく、景気が悪くなると不幸が増えてるも

んだなあ・・・」

「俺らの不幸はさ、

どこに持っていけばいいんだろうか?」

コンテスト結果

コラム番号	コラムタイトル	点数	順位	特別賞
		まじょコメント		
01	家に関する嘘 ~ 年代別 ~	11 pt	2 位	4 sp
		「だから、何もしないってば！」が、かわいいっ！ な表紙でした。なるほど～。各年代ごとに、うまくまとめましたね。ラスト、おもしろうてやがて悲しき人生で、しっかり落としていただきました。 アイディアが評価され、2 位 & 最多特別賞とたくさんの支持をいただきました、おめでとう！ 特別賞：進化論賞 by April fool班 嘘はやめましょう by Bye bye班 段ボール賞 by E（えむ）ですから班 白アリ賞 by God班 イチオシフレーズ：「オレンち、ロボットになるんだぜ！」「え？ ここ僕の家ですけど」		
02	その時	10 pt	3 位	1 sp
		いきなり手にしてしまったフシギ能力。まあ聖人でもない限り、誰でもこんな使い方をしてしまうのでは？ 巻き込まれた小さな人間の不条理さが緻密に描き込まれて、そこはしっかり伝わってきたのですが、ナゾの組織の意図とか背景の世界観が気になりました。 ぎっくりだけど、しっかり読んでもらえての3 位、おめでとう！ 特別賞：御愁賞様 by inJure班		
03	The man in London.	0 pt	8 位	0 sp
		おやホームズ君、こんなところで。 霧のロンドンという舞台設定にしたことで、ストーリーが奥行きを増し、老人の存在感が際立ちます。 よかったね、はっぴーえんど。		
		9 pt	4 位	1 sp

04	カモメの駅	アイヌ語が効いてます。さすが北海道産の作者さん。 カモメに託した惜別の思い。情緒ゆたかに描ききっていただきました。 ゆいいつ「こちらでよろしかったですか？」口調が不満。おーい、ファミレスの店員さんじゃないんだからっ。 特別賞：残りは少賞 by Floccinaucinihilipilification班（ったくメーワクなっ！）
05	「将来の夢は何ですか？」	2 pt 7 位 0 sp 泥棒、のひとことの見せ方の巧さ。そして、うわーんなオチ。ナイスナイス。 「彼」でなく「オレ」と一人称で語ったほうが、よりインパクトあったのでは？ イチオシフレーズ：「—そして、三年後。」
06	食べれるけど見えないもの	0 pt 8 位 2 sp なんていうか、「ふともものかんづめ」で大ウケしていたT Aさんたちっていったい.....。 そう言えば、黄桃って缶詰でしか認識してないよなあ、と改めて日常の見落としに気づいてみたり。 そのあたりにしっかり思想性が入っていて良かったのですが、ただ、何も自分でフィクションと宣言しなくっても良いのでは？ 特別賞：きもも賞 by aHa～an班 「ら」抜け賞 by LIE班 イチオシフレーズ：「ふとももの缶詰」
07	どうせなら最後まで	3 pt 6 位 2 sp せつないよね、青春。 そのせつなさを、気持ちの応酬のかたちで、しっかり描ききっていただきました。 典型的な光景だけれど、普遍性の高い光景。 特別賞：あのときはごめんなさい賞 by CO2班 理解できないで賞 by DHC for MEN
		6 pt 5 位 0 sp

08	フォックス・テイル	まとめましたね～三段組みミステリー。なるほどそうキーワードをつないだか、と納得。力作でした。 それにしても自分で血文字を残すとは、なっかなかに大胆不敵な稲尾さん。
09	事件後	0 pt 8 位 0 sp オオカミ少年、プラス、ピノッキオ、でしょうか。 噂話のがやがや感は出ていますが、誰が話しているか、状況をもう少しクリアにすると良いのでは。
10	鸞替え神事	19 pt 1 位 0 sp かわいいなあ。うちにも一羽ほしいです。この鸞くん。 鸞くんたちの、「人生ものは考えよう」という深遠なる人生哲学、しっかり学びたいところ！？ ちなみに、「消しゴムの角」はどうしてくれるんだ？ がTAさんたちの評価ポイントでした。 圧勝圧勝、首位&イチオシフレーズ大賞をさらいましたね、Fなんとも発音できるようになったし、おめでとう!! イチオシフレーズ：「消しゴムの角を使われた」知るかボケ×2 「ぶちっ」×2 『夢だった』『恋人の浮気を五六個よこせ！』